

Abstract

According to the present widespread image, Shinran, despite being a monk, married a woman named Eshin-ni. They are represented as a couple who helped each other and took care of their children. The image of the couple of "Shinran – Eshin-ni" was gradually established after the discovery of Eshin-ni's letter (Eshin-ni shousyoku) in 1921. Until then however, basing on modern biographies, it was generally accepted that Shinran's wife was Tamahi, the daughter of a nobleman.

Therefore, when exactly and how was the image of the couple of Shinran and Eshin-ni established in the modern period? It is very likely that this image reflects the idea of a modern family that privileges monogamy.

In this presentation, I will clarify how the image of the couple of "Shinran and Eshin-ni" was constructed in modern Japan through the mutual relationship between literature and history.

0.はじめに

現代における親鸞(1173-1262/1263)のイメージは、僧侶でありながら妻帯し、恵信尼(1182--?)を妻としたというのが一般的である。とりわけ、親鸞と恵信尼は結婚し、互いに助け合って生活して子供達を育てたというのが、「親鸞—恵信尼」夫婦像の典型である。このイメージは、大正10(1921)年の「恵信尼文書」(「恵信尼消息」)の発見以降、次第に定着してきた。

しかしながら、近代以前の伝記においては、親鸞の妻は玉日とするものがほとんどであり、親鸞の妻帯の物語は玉日を相手とするものが主流を占めていた。では、現代の「親鸞—恵信尼」夫婦イメージはどのようにして形成されてきたのだろうか。

1. 親鸞の妻帯の物語の形成と定着

親鸞自身は妻帯について何も語っておらず、妻についての言及もしていない。13世紀末に本願寺三世覚如(1270-1351)によって作成された、親鸞の生涯を記した絵巻物「親鸞伝絵」(「伝絵」)にも、親鸞が結婚したことや妻は、全く描かれていない

親鸞の妻帯とその妻について記した最も古い記録は、『親鸞聖人御因縁』(『御因縁』)である。成立したのは、正応元(1288)年頃から永仁三(1295)年以前、つまり「伝絵」より少し前に制作された親鸞伝である。

ここで語られる親鸞の妻帯の物語とは、次のようなものである。

建仁元(1201)年十月、月輪法皇という人物が法然のもとを訪れ、出家者(僧侶)の念仏と出家していない者(俗人)の念仏では、極楽へ往生する上で何か違いがあるのかと尋ねた。それに対して法然は、違いはないと答えた。

それを聞いて法皇は、両者の念仏に本当に違いがないのなら、法然の弟子の中で、これまで戒律を破ったことのない僧を一人、俗人に戻させて(妻帯させて)、その証拠を見せてほしいと求めた。そこで法然は親鸞を指名したところ、自分は九歳で慈円の弟子になり、二九歳で法然の門下に入って、三八歳になる今日まで戒律を守ってきたのに、戒を破って俗人になれとは恨めしいと、固く拒否した。ところが法然は、六角堂で親鸞が救世菩薩から夢告を受けたことを知っており、そのようなお告げを受けたのであれば、妻帯して俗人になるようにと促した。そこで親鸞は法皇の御殿へ向かい、法皇の七番目の娘である玉日の宮と夫婦となった。その三日後、親鸞と玉日夫婦は一緒の車に乗って法然の元を訪れたところ、法然は玉日を見て、「問題のない坊守(配偶者)である」と言ったという。これより、念仏の道場のあるじを坊守と呼ぶようになった。

この伝記では「ソノ夜ヤカテ^{ホフワウ}法皇ノ第七ノヒメミヤ、^{タイシチ}玉日ノミヤトマウス^{オン}御ムスメトアハセタテマツリ」¹と記されており、「アフ」は男女の契りや結婚を意味する。「アハセタ」とあるのは、法皇が親鸞と玉日を「結婚させた」ことを示しており、さらにこの書には「親鸞ハ夫婦同車シテ」^{シンラン フウフトウシヤ}との文言もある。したがって、ここでの内容が、親鸞が妻帯し、玉日を妻としたというものであることは明らかである

そしてこの『御因縁』以降、親鸞の妻帯はこの物語が一つの「型」となって定着していく。『御因縁』の次に親鸞の妻帯を語る伝記が、『御因縁』の注釈書として作成された『親鸞聖人御因縁秘伝鈔』である。作者不詳のこの書が著されたのは室町時代初期とされるが、刊行されたのは正徳六（1716）年で、すでに江戸期に入っている。この親鸞伝は、佐々木月樵(1875-1926)によって「我親鸞聖人御出家御妻帯の因縁を最も詳かに記述したるもの也」²と評価されているように、全体の半分以上の紙幅を割いて、親鸞の妻帯のことが詳細に書かれている。ここでも、先述の『御因縁』とほぼ同じ文言で法然の命を受けた親鸞が玉日を妻にしたと語られ、そのことについてより詳しい内容が記されている。

これ以降、親鸞の妻帯は、『御伝照蒙記』（1664年初版）³、『善信聖人報恩抄』（1687年）⁴、『康楽寺白鳥伝』貞享年中（1684-88年）⁵、『高田親鸞聖人正統伝』（1717年）⁶、『高田親鸞聖人正明伝』（1733年）など、江戸期に刊行された伝記を通して定着していく。これらの中では、「在家一同ノ宗旨ヲヒラキ玉ヒテ」⁷と「妻帯ノ宗風ヲ弘メハ、吾女身ヲ現シ妻トナリテ是ヲ始ムヘシ」⁸といった文言で、親鸞の妻帯が浄土真宗の宗風の起源として語られ、特に『高田親鸞聖人正統伝』では、親鸞が妻帯の宗風を広める際、親鸞に夢告を受けた六角堂の救済菩薩が女性の身になって妻となるといった物語となっており、玉日が菩薩の化身として表現されている。

以上のように、近世の伝記における親鸞の妻は玉日であり、親鸞とともに在家と同じ宗風を広めた菩薩の化身として語られていることをここで確認しておく

2. 「恵信尼文書」の発見と大正期親鸞ブーム

2-1. 大正期親鸞ブーム

一方、明治に入ると、近代的な実証史学によって「伝絵」をはじめ、それまでの伝記の批判的検証が加えられていく。村田勤の『史的批評親鸞真伝』（1896年）を皮切りに、「如来の化身」として親鸞を讃えてきた「伝絵」やその他の伝記の記述に対する批判的な検証がなされ、生身の人間としての親鸞の姿が頭にされていったのである。特に長沼賢海の「親鸞聖人論」は、近代のアカデミック史学として初めて親鸞の伝記を検証し、「伝絵」の記述を徹底的に検証したものである⁹。この流れの中で「史実」としての親鸞の人生が浮き彫りにされていき、「伝絵」や伝記といった「物語」で語られてきた親鸞の神秘的要素が排除されていった。

¹ 底本、毫撰寺蔵写本「親鸞聖人御因縁」大系真宗史料刊行会編『大系真宗史料 伝記編一 親鸞伝』法藏館、2011年、5頁。

² 佐々木月樵編『親鸞傳叢書』無我山房、1910年、3頁。

³ 知空作。1671年に第二版、1677年に第三版が刊行される。塩谷（「解題」大系真宗史料刊行会編『大系真宗史料 第二卷 御伝鈔注釈』法藏館、2008年、437頁）によれば、第三版は本文を忠実に覆刻して訂正を加え、頭注を付加している。

⁴ 知足軒による作成。本書は、佛光寺の「伝絵」（『善信聖人親鸞伝絵』）に依りつつ親鸞の生涯と仏光寺史を述べたものである。

⁵ 信濃塩崎康楽寺によって作成（塩谷「解題 康楽寺白鳥伝」大系真宗史料刊行会編『大系真宗史料 伝記編三 近世親鸞伝』法藏館、2007年、459頁（康楽寺は文亀二（1501）年頃に本願寺教団へ参入し、「絵伝の家」として親鸞伝の多くの絵解き本を作成した寺で、現在確認できる「康楽寺系最古の絵解き本」がこの『白鳥伝』である（塩谷菊美『語られた親鸞』法藏館、2011年、186頁）。

⁶ 高田派の五天良空（1669-1733）制作。

⁷ 「康楽寺白鳥伝」前掲『大系真宗史料 伝記編三 近世親鸞伝』、16頁。

⁸ 「高田親鸞聖人正統伝」大系真宗史料刊行会編『大系真宗史料 伝記編一 親鸞伝』法藏館、2011年、174頁。

⁹ 『史学雑誌』に1907年から10回にわたり連載。1928年に『日本宗教史の研究』として刊行された。

これに対し、同じように人間としての親鸞に焦点を当てて、それを文学上で表現して人気を博したのが、倉田百三の『出家とその弟子』(1917年)である。刊行されるや圧倒的な人気を獲得し、たちまち大正年間に百数十版を重ねた本作は、戦後になるまで「学生、知識人の親鸞像は本書の影響下にあった」といって過言ではない¹⁰とも言われる。本作では、真宗とキリスト教の思想を取り入れた倉田独自の親鸞像が展開されており¹¹、その分批判も多かったが、多くの読者を獲得し、「『教祖親鸞』でなく、親しみやすい『人間親鸞』¹²」のイメージを普及させた。

この作が火付け役となって生じたのが、大正11(1922)年前後における親鸞の流行現象である。「親鸞ブーム」と呼ばれるこの流行では、親鸞を題材にした戯曲や小説、評論などが立て続けに発表されている。

【大正期親鸞流行期の作品群】¹³

大正11年

- 1月 石丸梧平『人間親鸞』蔵経書院
- 3月 江原小弥太「戯曲親鸞」『新小説』
- 4月 香春建一『戯曲親鸞』更新社、小松徹三『燃え出づる魂(親鸞の新生)』弘文閣
- 6月 石丸梧平『受難の親鸞』小西書店
- 7月 村上浪六『親鸞』明文館書店、三浦関造『創作親鸞』京文社¹⁴
- 8月 石丸梧平『戯曲人間親鸞』大日本真宗宣伝協会、茅場道隆『戯曲親鸞』耕文堂、山中峯太郎「親鸞の出家」『中央公論』
- 9月 石丸梧平「戯曲流人親鸞」「女性」
- 11月 松田青針『人間苦の親鸞』春陽堂、山中峯太郎『戯曲親鸞聖人』東光会¹⁵
- 12月 田島淳『親鸞—喜劇一幕—』「劇と評論」

大正12年

- 1月 吉川英次¹⁶『親鸞記』東京毎夕新聞社出版部

大正13年

- 11月 松田青針『大凡愚親鸞』春陽堂

その他、同時期の雑誌でも、「大正に活現せる親鸞信仰と日蓮信仰」(『大観』)や、「親鸞聖人の八面観」(『親鸞教』)、「親鸞と現代社会」(『解放』)などの特集が生まれ¹⁷、「流行親鸞批判号」¹⁸と銘打った雑誌も刊行され、『粹な親鸞様』¹⁹といった評論も出版されている。

2-2. 大正期親鸞ブームにおける「親鸞—恵信尼」夫婦像

このように、大正11年前後の社会では親鸞の大流行が巻き起こり、様々な親鸞像が生み出されていったのだが、この流行の直前、史学史上における大きな出来事があった。大正10年の「恵信

¹⁰ 福島和人『近代日本の親鸞——その思想史』法藏館、1973年、223頁。

¹¹ 例えば倉田は本作に対して次のように述べている。「此の作は厳密に親鸞聖人の史實に拠つたものではない。…(中略)…私の書いた親鸞は、どこまでも私の親鸞である。私の心に触れ、私の内生命を動かし、私の霊の中に座を占めた限りの親鸞である。随つて此の作に表はれた私の思想も無論純粋に浄土真宗のものではない。」(倉田「『出家とその弟子』の上演について」『倉田百三選集』第一巻、春秋社、1963)、176頁。

¹² 末木文美士「迷走する親鸞——『出家とその弟子』考——」『季刊 日本思想史』七五号、2009年、119頁

¹³ 大正期親鸞流行期の作品については現在、報告者の監修にて『親鸞文学全集大正編』(同朋舎新社、2017~2018年)として第1巻~第8巻までが復刻出版されている。

¹⁴ 第一部は七月八日、第二部は七月二十八日発行。

¹⁵ 発売は警醒社書店。

¹⁶ 吉川英治の本名。「英次」にて刊行。

¹⁷ 『大観』十一月号、1921年、『親鸞教』四十巻一号、1922年、『解放』四巻七号、1922年。

¹⁸ 『宗教と芸術』第三巻第十一号、1922年、12月。

¹⁹ 加藤美侑『粹な親鸞様』朝香屋書店、1923年。

尼文書」の発見である。この発見により、親鸞の実在が確かめられ、書かれた内容と「伝絵」などの伝記との照合が進められていった。

では、この直後に起こった親鸞流行において、親鸞と恵信尼はどのように描かれたのであろうか。史学上での検証は、どの程度文学上の親鸞の描写に影響しているのだろうか。

結論を言えば、この流行を代表する上記 16 作品のうち、親鸞の妻を恵信尼とするものはほとんどない。この時期の作品における親鸞の妻は、玉日、または玉日姫であり「恵信尼」という名の親鸞の妻は登場しないのである²⁰。玉日以外の妻を登場させた作品には、山中『親鸞の出家』（朝女）、『戯曲親鸞聖人』（恵信）、吉川『親鸞記』（朝姫）があるが、どの作品も玉日と死別後に親鸞が妻を娶ったとする。親鸞の妻帯の描写についても、親鸞が結婚する場面や夫婦生活ではなく、結婚に至るまでの親鸞の葛藤や（石丸『人間親鸞』）、流罪となって妻と離れ離れになって寂しがる親鸞の様子など（松田『人間苦の親鸞』）、結婚後の親鸞の生活の方に重点的に取り上げられている。香春の『戯曲親鸞』に至っては、近世の伝記において京都にて早逝したとされている玉日が、親鸞が流罪を赦された後に過ごした稲田にも登場し、親鸞と共に生活する描写がある。ここでは、玉日が後の妻とされる恵信尼と同一視されているきらいがある。

このように、「恵信尼文書」発見直後における文学上では、「親鸞—恵信尼」夫婦像よりも「親鸞—玉日」夫婦像の方が優位であり、恵信尼と思しき人物が登場するとしても、それは玉日の後妻としてか、玉日と同一視されているのである。

3. 史学上における恵信尼像の定着

それでは、「恵信尼文書」発見以降の近代歴史学において、「親鸞—恵信尼」夫婦像はいかに記述されていったのだろうか。

先述のように、近代において親鸞の伝記は村田勤の『史的批評親鸞真伝』（1896年）以降盛んに検証されるようになっていく。大学のアカデミック史学としては、長沼賢海が初めて「伝絵」の記述の批判的検証を行い、これは、『日本宗教史の研究』（1928年）としてまとめられる。さらには、親鸞ブームと同年に中沢見明が『史上の親鸞』（1922）で「伝絵」を覚如の夢物語とまで批判するに至った。

こうした史学上の親鸞をめぐる議論が進む一方、大正 10 年に鷲尾教導によって「恵信尼文書」が発見され、これを踏まえて梅原真隆の『恵信尼文書の研究』（1957年）が刊行される。しかし、「恵信尼文書」を活用して具体的に越後時代の親鸞が検証されたのは、1950年代から 60年代にかけてである²¹。この中で越後時代の親鸞を取り上げたのは、梅原隆章（『親鸞伝の諸問題』）、藤島達朗（『恵信尼公』）、宮崎円遵（『親鸞とその門弟』）、松野純考（『親鸞—その生涯と思想の展開過程』）、赤松俊秀（『親鸞』）である。

親鸞の妻帯を取り上げた研究のうち、親鸞の妻が 3 人説をとるのが中沢（『史上の親鸞』）、藤原由〇雪（『真宗史研究』1938）である。しかし越後時代の親鸞に注目した上記の 1950 年から 1960 年にかけての研究（梅原・藤島・宮崎・松野・赤松）では、親鸞の妻を恵信尼一人としてみるか（梅原・藤島・松野）、二回目の結婚での妻を恵信尼とするもの（宮崎・赤松）に分かれる。これらの研究においては、基本的に親鸞は同時に二人の妻を持つことはなく、恵信尼と越後で暮らした「良き家庭人としての親鸞像」²²として記述されている。

一方、恵信尼については、いずれの研究においても越後出身か越後での結婚説が提唱されている。さらに、上記 5 人（梅原・藤島・宮崎・松野・赤松）は、親鸞が常陸へ移った後に京都に戻る際、恵信尼もそれに付き従って帰洛したとする。つまりこれらの研究では、親鸞と恵信尼の夫婦は、越後、常陸、京都にて共に生活したものとして論じられているのである。

したがって、史学上における「親鸞—恵信尼」像の確立は、1950 年から 60 年代においてであり、親鸞の妻は一人であり、二人は共に暮らしたというのがこの時代の二人のイメージであった。

²⁰ 「恵信尼消息」の影響と考えられる記述としては、松田『大凡愚親鸞』に「弥女」、山中『戯曲親鸞聖人』に「弥姫」が親鸞の娘として登場し、最期を看取る描写がある。なお現在では、「恵信尼消息」で出てくる「いや女」とは娘ではなく、親鸞に仕えていた女性とされている。

²¹ 由谷裕哉「親鸞の越後配所を巡る記憶の生成と確立」『三田社会学』14号、2009年、112頁。

²² 由谷、前掲「親鸞の越後配所を巡る記憶の生成と確立」、112頁。

4. 歴史学と文学の相互作用

それでは、こうした史学上での「親鸞—恵信尼」夫婦像が打ち出された1950年から60年代において、文学上でこの夫婦はどのように描かれたのだろうか。

この時期に親鸞を題材にした文学作品のうち、恵信尼を登場させるものは、寺田弥吉『出家と魔性』(1957)、丹羽文雄『親鸞とその妻』(1957)、平北北堂『親鸞』(1959)、知切光蔵『法縁の人々』(1960)、寺田弥吉『本願寺物語』(1967)、菊村紀彦『親鸞』(1968)であり、この前後の作品として、1948年刊行の吉川英治『親鸞』、松田良夫『上越の恵信尼』(1972)がある。これらの作品においても、親鸞は同時に2人の妻を持つことはなく、玉日が死去したのちに恵信尼と結婚し、越後もしくは常陸、京都において二人で生活する。玉日を取り上げるものであっても、恵信尼の方が重点的に描かれ、丹羽の『親鸞とその妻』では、玉日との結婚を連想させるエピソードはあるものの、玉日は全く登場しない。つまり、この年代の文学上での「親鸞—恵信尼」像は、史学分野におけるイメージとほぼ重なっている。

先述のように、「恵信尼文書」発見直後の文学作品では、親鸞の妻を玉日とするものがほとんどであった。そうしたなか、1925年の安井広度の『親鸞聖人と恵信尼の面影』では、「恵信尼文書」に基づき親鸞の生涯を記述し、玉日を登場させていない。だが、同年の佐野敏一『日蓮と親鸞』に親鸞の妻として登場するのは依然として玉日一人である。

昭和に入った1922年以降はというと、里山善郎『邪心親鸞』(1926)でも親鸞の相手は玉日であり、木村善之『愚禿親鸞』(1934)寺田弥吉『親鸞三部曲』(1935)においても同様である。しかし次第に玉日説よりも、1941年の山辺習学『わが親鸞』、寺田弥吉『出家と魔性』(1958)のように、玉日の後に恵信尼を娶ったという記述がなされていく。

特に、郷土史家の平野団三によって越後での親鸞と恵信尼の生活が次々と明らかにされていくなかで(「親鸞聖人配所竹ノ内草庵と越後の法流」1966、『越後と親鸞・恵信尼の足跡』[1971]1972→1973ほか)、親鸞と恵信尼の越後での共同生活が詳細に検証されていくようになる。1989年には、松田良夫『信じて愛して—親鸞と恵信—』が刊行されてその夫婦愛が協調される。現段階では、親鸞の妻を生涯恵信尼一人とする一番早い文学を確定できていないが、五木寛之の『親鸞』(2010)では、玉日は全く登場しなくなる。一方、現代の歴史学においては、根拠の曖昧な伝記の記述が否定され、玉日の実在が否定される傾向が強い。

5. まとめ

玉日と親鸞との結婚を伝える『御因縁』や『正明伝』の記述には誤りが多く、根拠がないとして、玉日の実在は否定されており¹、その一方で玉日の実在を主張し、『御因縁』や『正明伝』など本願寺系統以外の親鸞伝と、玉日の存在は、恵信尼の血筋を継ぐ本願寺によって否定されたとの反論もある²。しかし、親鸞の妻が玉日姫なのか恵信尼なのか、あるいはどの親鸞伝に史実が残されているとするのかといった問題と、「妻帯した僧・親鸞」像は切り離して論じるべき事柄だろう。親鸞と恵信尼の夫婦像にしても、一夫一婦制や夫婦の同居など近代的結婚観との関連から考察する必要がある。

これまでみてきたように、「親鸞—恵信尼」夫婦イメージにおいて、「歴史学」と「文学」が果たした役割は大きい。「事実」を検証する歴史学と、「物語」としての文学上の親鸞像は、相反するようで実は相互に影響し合っているのではないだろうか。今後は、そうした「歴史学→文学」と「文学→歴史学」によって生じる親鸞イメージの検証が課題である。

¹ 平雅之『歴史のなかに見る親鸞』法蔵館、2011年、105～109頁。

² 松尾剛次『親鸞再考—僧にあらざらず俗にあらざらず—』日本放送出版協会、2011年、163頁)は、玉日姫の存在が否定されている点および、一夫一婦制の下で恵信尼が「坊守」(真宗寺院住職の妻)のモデルとされ、教団内には恵信尼以外の妻の存在を認めたくない傾向があったと指摘する。また松尾は、高田派の作成した『正統伝』や『正明伝』など、本願寺系以外の親鸞伝の重要性を主張する立場をとる。その他、佐々木正(『親鸞—封印された三つの真実：黙殺されてきた『親鸞聖人正明伝』を読み解く』洋泉社、2009年)も『正明伝』の記述の信憑性を主張している。